

年間第3主日

2016.1.24

ルカ 1・1-4, 4・14-21

イエズス会 柴田 潔

今朗読された箇所は、イエスの就任演説と呼ばれています。これからイエスが何をしていくのか、その目標を語っています。聴きに來たのは、「貧しい人・・・捕らわれている人・・・目の見えない人・・・圧迫されている人たち・・・」で、主の恵みを求めて集まってきました。

最近、圧迫から自由を求めている人に出会いました。一ヶ月前のミサで、山口の幼稚園が日本に來られた難民のために募金（街頭募金）をしている話をしました。（<https://www.refugee.or.jp/jar/report/2016/01/21-0004.shtml> 合計75万円の募金が集まりました。）ご存知のように、難民は、母国にいと命が危なくて仕方なく逃げなければならなくなった人たちです。行き先は自分で選べないことが多く、一番最初にビザが下りた国になるケースが少なくありません。日本語がわからないし、知り合いもいないけど、偶然日本に逃げてきた人もいます。けれども、そのあと、お金が尽きて、泊まる場所もお金もなくなって、ホームレスになってしまう人もいます。園児さんが募金をゆだねている四ツ谷の難民支援協会さんは、そのような難民を助けています。広報部の方から具体的な家族の話を聴きました。

年が明けてすぐに、アフリカのある国から逃れてきたお父さんがいます。幼稚園児くらいの2人のお子さんを連れて來られました。もう、お金はほとんど持っていませんでした。確保している一時宿泊施設は他の難民の方で満室でした。大人でも大変なのに、小さなお子さん2人が寒空の下で過ごすのはあまりにも酷なので、急遽、ホテルを手配しました。お父さんは子どもたちを守るためにも必死です。子どもたちはその様子を察してか、とてもお利口で、泣くこともわがままを言うこともなく、お父さんの横にぴったりついて、相談が終わるのを静かに待っています。ホテルは四ツ谷の難民支援協会の事務所から一駅以上離れたところにありますが、いつも一緒に事務所まで歩いて來られます。わたしたちは健気な子どもたちの姿にいつも心を打たれます。園児さんからの募金で、お父さんと2人のお子さんは、一日一日乗り切っています。わたしも出来る限り寄り添っていきます。

お父さんと2人のこどもの話を幼稚園に伝えると、一生懸命募金してくれた

園児さんがお祈りを始めました。「今日、東京は雪で大変なんだね。難民のお友だちに早く献金が届きますように」、「今日、ご飯を食べられますように」、「今日、寒くないお部屋で過ごせますように」。募金のために大好きなガチャガチャや、好きなお菓子を我慢して募金してくれた幼稚園の子たちは、お祈りでも難民の家族を支えています。

お父さんは「今日」、子どもたちのために必死です。そして「今日」、幼稚園の子どもたちが祈っています。イエスの与えたかった「主の恵み」が、「今日」東京で実現しています。

「主の恵み」はいつ来るのかはっきりしないと、わたしたちは思っているかもしれません。でも、イエスは、「今日、耳にしたときに実現した」と言いました。この「今日」という言葉は、ルカ福音書のキーワードです。「今日、ダビデの町であなたの方のために救い主がお生まれになった」(2・11)。ザアカイに「今日、救いがこの家に訪れた」と語っています(ルカ 19・10)。十字架上で犯罪人の一人に「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ 23・43)と、赦しました。「恵みの時」が「いつか」ではなくて、「今日」来ると言っています。苦しくてもう諦めかけていたことも、「今日」起こると、イエスは断言します。

わたしたちは「主の恵み」が「今日」実現すると心から期待しているでしょうか？何か良いことを思いついても、明日しようと考えていないでしょうか？もっと神様に感謝したい、あの人を赦したいと思っても、先に延ばしていないでしょうか？でも、それは誘惑なのでしょう。「主の恵み」は「今日」のことです。「今日」、難民のお父さんのように「主の恵み」を受けましょう。「今日」、「主の恵み」を喜びましょう。「今日」、ザアカイのように「回心」しましょう。「今日」、「主の恵み」で人を赦しましょう。わたしたちも「今日」、「主の恵み」に与っていきましょう。